

ほんじょう よしゆき
本庄 吉幸

ライオンヘアのうしろ姿

日本郵政公社労働組合・副執行委員長

隣の女性に耳元で「男の人の後ろ姿って意外に無防備ね...」とささやかれ思わずニヤリ。勘違いのないように補足するが、ところは第9回連合定期大会議長席、目の前には総選挙に圧勝した小泉首相の後ろ姿。テレビや新聞には自慢のライオンヘアを際立たせたアングルで登場するが、一段高い議長席からは見下ろす格好。いままで気づきもしなかったが後頭部が薄い。「意外だな」と思っていたら隣の女性議長が件のセリフを口にした。事前の打ち合わせで来賓に小泉首相がいるのを知らされてはいた。マスコミの注目度が高いから総選挙の余勢で派手なパフォーマンスをするだろうと思っていた。しかし、挨拶は淡々とした調子で一国の首相には失礼だが、貧相な後ろ姿と女性議長のセリフしか印象に残らなかった。ところが、自宅に帰ってテレビを見ていて驚いた。画面いっぱいに登場した小泉首相が自信たっぷりに挨拶する映像が、各局のニュース番組で繰り返し放映される。後頭部の薄さはもとより、私が感じた貧弱さなど微塵も見あたらない。

メディアの世界に「サウンドバイト」という言葉があると聞く。著名人の発言がニュース等で流されるとき、数秒から長くとも数十秒に編集される。その一つひとつの発言の塊を言うらしいが、秒単位で進行するメディアの世界では短く編集することが難しい人物は嫌われ、言葉

にインパクトのある人が歓迎される。ワンセンテンス・ポリテックスと称されるだけあって、首相の発言は劇場型の今の政治シーンにはうってつけなのかも知れない。しかし、そこにはものごとの本質や真実を覆い隠そうという演出臭、はっきり言えばうさん臭さがつきまとう。

「自民党をぶっ壊す」と叫んで得た国民の人気を背景に政権を担って4年目の昨年、首相は郵政民営化法案が参院で否決されるや否や「改革を止めるな」と絶叫し衆院解散・総選挙に打って出た。当然、私たちはこの4年間の小泉政治の是非を争点に据えた。結果はいまさら繰り返すまでもなく惨憺たるものとなった。私たちの「小泉政治は多くの国民の生活を破壊し、将来への不安をいだかせている」との分析は間違いだったのだろうか。

分析に誤りはなかったと思う。手もとにある政府機関の各種調査をざっと見直すだけでも、国民の現状に対する不満や将来に対する不安、そして二極化が進行する日本社会の現実が浮き彫りになる。例えば、厚労省の国民基礎調査によれば「生活が苦しい」世帯は全世帯の過半数を超え53.9%となっている。内閣府がおこなった安全・安心に関する特別調査では、今の日本を安全・安心と思わないと答えた人が56%に達している。多くの人がある理由に少年非行や犯罪の増加とともに「雇用や年金など経済的見通



しが立てにくい」をあげる。二極化は深刻な様相を呈し、非正規労働者の増加傾向は小泉政権下で拍車がかかり労働力調査（総務省）によれば、03年までの5年間で331万人も増加し、全雇用者の30%を超えた。非正規労働者の賃金水準は男性で正規労働者の49.9%、女性で44.4%(厚生省賃金構造基本統計調査)であり、年収換算すると男性は200万円に達せず、女性は120万円前後に抑えられている。年収200万未満世帯数は非正規労働者の増加と軌を一にしており、いまや5世帯に1世帯は貯蓄ゼロ（金融公報中央委員会調査）となり、小泉政権発足時80万世帯だった生活保護世帯は4年後には100万世帯を超えた。しかし、そうした現実はこの総選挙では争点にならなかった。いや、正しくは、そうした現実にある人々も共鳴し支持したのは小泉自民党だったと言うべきなのかも知れない。

小泉政治に代表される政治潮流は、本質的には大変怖い政治だと思う。メディアの特性を熟知しているから、メディアを喜ばす術を駆使しつつ大衆の中にある雰囲気を感じにすくい上げ、自らの陣営に引きつける。敵と味方を簡単に峻別するのもそうだし、強引に対立軸をつくり上げ誰にでもわかる短い言葉で政敵の批判を絶叫することもそうだ。そして、何よりも怖いと思うのは人々の不安や現状への不満を種火に、人の心の暗闇にある妬みや嫉みに火をつけ

多くの大衆を惹きつけようとする事だ。小泉氏は国民の閉塞感を「改革！」と連呼することで払拭し「改革を止めるな！」と叫ぶことで、あたかも全ての問題を解決するかのごとく見せかけ大衆の支持を得た。

しかし、腕をまくり改革を絶叫する姿と連合大会の議長席から見た貧相な後ろ姿がどうしても一致しない。普通の人には日常の生活では後ろ姿など気にもしない。だから後ろ姿には自然と人柄がにじみ出るように思う。小泉氏の場合はどうなんだろうか。彼につきまとううさん臭さは、貧相な後ろ姿とライオンヘアで絶叫する姿との乖離をメディアで埋めているからではないかと勘ぐってしまう。

権力とメディアが結びつく怖さと悲惨な結果を、私たちはつい60年前に経験している。ものの本によればヨーロッパを恐怖と破壊におとし入れた第三帝国の宰相も小柄で風采のあがない人物だったという。小泉氏と第三帝国の宰相が同じだなどと言うつもりは毛頭ない。しかし、小泉氏に代表される政治潮流はパンドラの箱に手を掛けてしまったのではないかとも思う。

その箱の蓋をもう一度しっかり封印するためのたたかいが本当に必要になったと21世紀に入って6年目の年頭にあらためて強く思う。